

追放された最強令嬢は、 新た人生を自由に生きる

3

Tohno
灯乃

ill. 深破 鳴

登場人物紹介



デズモンド

東の国境を守る
辺境伯家の当主。
アレクシアの実の祖父。



セフィード

アレクシアが保護した
寡黙な魔導兵士。
戦闘に長けている。



キャスリーン

アレクシアの
クラスメイト。
姉御肌。



ジョッシュ

ツツコミ気質な
アレクシアのク
ラスメイト。



フェルディナント

エッカルト王国の
英雄。



ブリュンヒルデ

アレクシアの母。
才知に長けた
美女。



ベネディクト

アレクシアの
腹違いの弟。
大人しいけど搖るぎない
信念の持ち主。



ローレンス

ランヒルド王国の王太子。
お人好しで、ちょっと
思い込みが激しい。



ウィルフレッド

アレクシアの
たったひとりの従者。
クールかつ優秀だが、
主のやらかしに
翻弄されがち。



ダイアナ

アレクシアの腹違いの姉。
夢見がちなわがまま娘。



アレクシア

辺境伯家を追放された
本作の主人公。
賢くて腕が立つ最強の
お嬢さまだけれど、
平民としてはまだ勉強中。

第一章 姉弟

湖畔に佇むその優美な屋敷は、ランヒルド王国王都郊外の風光明媚な土地にあつた。広々とした敷地をぐるりと取り囲む鐵柵は、織細なデザインながら要所要所に魔導結晶が嵌め込まれており、防御魔導フィールドの展開が可能な仕様となつてゐる。

敷地内は、ずっと専用の魔導具で管理されていたのだろう。屋敷の主が去つてから半年以上が経過しているにもかかわらず、濃い緑の芝生が美しく整えられている。

白い壁に紺色の屋根。

湖に面した東翼から続くサンルームは、ちょっとした茶会を楽しむためのものなのだろうか。外観の緻細なデザインといい、いかにも高貴な女性の住まいらしい建物である。

「ほう。これだけ玄関ホールが広ければ、屋内訓練場としても充分使うことができそうだな」そんな屋敷の新たな主となつたアレクシア・スティングラーは、母親のブリュンヒルデから譲り受けた鍵で扉を開け、思わず感嘆の声を上げた。

同行していた従者のウイルフレッド・オブライエンが、ざつと内部を見回し、満足そうに頷く。

「そうですね。どうやらこの屋敷に配備されている清掃魔導具は、非常に高性能なものようです。とても、半年以上も閉め切っていた場所には見えません」

その言葉に、もう一人の少年——セフィード・ガーディナーが、こてんと首を傾げる。

「清掃魔導具?」

祖国で非人道的な扱いを受けていたセフィードは、どうやら清掃魔導具の存在を知らないらしい。アレクシアは、そんな彼を振り返つて簡単に説明する。

「清掃魔導具というのは、建物の敷地内を常に清潔に保つ道具だ。我々のように、掃除の人員を雇うことができない者にとっては、非常にありがたい存在だな」

なるほど、とセフィードが頷く。

「おれのいた研究所では、下働きの人間が清掃業務を担つていた。だが、機密保持のためにはこちらのほうが都合がよさそうだな」

「ああ。ただ、大きな建物全体をカバーできる清掃魔導具となると、非常に高価になってしまふんだ。この屋敷に配備されているものも、屋内用と屋外用のトータルで、おそらく最新銃の狙撃銃型魔導武器五挺^{ごちょう}、ぶん程度の値段になると思うぞ」

セフィードのアイスブルーの瞳が、まばたきをする。

「それは、高いのか?」

兵士として育てられていた彼のため、わかりやすいたとえ話をしたつもりだったアレクシアは、そこはかとない敗北感に肩を落とした。

「……うむ。おまえが好んで食べているベリーのマフィンを、どれだけ食べてもなくならないほど用意できるくらいには、高価だな」

「そうか。それは、すごいな」

淡淡^{たんたん}と応じるセフィードは、癖^{くせ}のないサラサラの銀髪に、役者のように整つた顔立ちをしたとても可愛らしい少年である。

先日、このランヒルド王国に宣戦布告^{せんせんふこく}してきた七力国連合。

セフィードは、その尖兵^{せんぺい}としてアレクシアの前に現れた。

敵陣営の飛行魔導士^{ひこうまどし}だつた彼が未成年だと知ったのは、交戦のち投降を促^{うなが}したときのことだ。飛行補助魔導武器の運用実験における被検体^{ひけんたい}だつたという彼を、アレクシアは保護して連れ帰つた。

その後、国王との交渉の末、セフィードは『礼儀正しく可愛い普通の子ども』として生きる術^{すべ}を学びながら、アレクシアの庇護^{ひご}下で暮らすことになったのだ。

セフィードに与えた『ガーディナー』という家名は、現在彼女とウイルフレッドが用いている偽^{わざ}名である。

東の国境守護を任とするスティングラー辺境伯家で、アレクシアは幼い頃から最高の淑女教育^{しゅじょきょういく}とある。

兵士教育を施^{ほどこ}されてきた。

だが、半年前の冬の日、彼女は両親の離縁と再婚を機に、ウィルフレッドとともに辺境伯家から追放されている。

王太子の頼みで辺境伯領に現れた侵略者は排除したもの、今のアレクシアが当主の命令に反して出奔^{しうっぽん}した身である事実は変わらない。

もつとも、国王から直々に東の国境守護を依頼している以上、スティングラー辺境伯家がそれに異を唱えることはないだろう。

今後事態がどう動くにせよ、生家から暗殺者を差し向けられる心配がなくなつただけでもありがたい。

現在は王都のシンフィールド学園に通い、寮生活^{りょうせいかつ}をしているアレクシアとウィルフレッドだが、今は夏期休暇の真っ最中。

在学中は基本的に寮住まいだが、将来的な生活拠点となる屋敷の状態を確認するため、セフィードを連れてやってきたのだ。

一同はひととおり屋敷内を検分し、東翼の主寝室をアレクシアが使うことに決まった。

ウィルフレッドとセフィードも、同じフロアの使い勝手がよさそうな部屋をそれぞれ選ぶ。

主寝室の続き部屋のクローゼットには、今のアレクシアにちょうどいいサイズのドレスやワン

ピース、靴や帽子に手袋ばかりでなく、流行のアクセサリーまでもがみつしり詰め込まれていた。

政略結婚によって生まれた子であるアレクシアは、つい最近まで実の母であるブリュンヒルデと一度も会話をしたことがなかつた。

ずっと離れ離れに暮らしていた母が、なぜ娘の衣服や靴のサイズを知つているのか、不思議に思う。

まあ、世の中には、見ただけで相手のサイズを完璧に把握^{はあく}できる特殊能力を持つ者がいるというし、きっとそういうことなのだろう。

「アレクシアさま。オレの部屋のクローゼットに、ジャストサイズの各種衣服——普段着から盛装^{せいとう}、戦闘服^{せんとうふく}だけでなく、ランヒルド王国軍の魔導兵士部隊で採用されている最新型の魔導武器が、山ほど詰め込まっているのですが……」

「アレクシア。おれの部屋のクローゼットに、若い女が着るような服や靴がたくさん入っていたんだが、隣の部屋の物置に移していいか?」

「……ウィルは、ありがたく受け取つておくといい。あとで、ブリュンヒルデさまにお礼状を出しておく。セフィードは、向かいの部屋に移動しろ。そちらのクローゼットに、若い男向けの衣服が入つていた。おまえの体に合う服もありそうだつたから、どれでも好きに使つていいぞ。不要なものは、まとめて適当な部屋に放り込んでおけ」

ウィルフレッドたちの報告に、アレクシアはこの別邸に関する話をしたときのブリュンヒルデの言葉を思い出す。

——少々忘わすれものがあるかもしませんけれど、それらはあなたの判断で処分していただけます。

そして、ちょっとぴり遠くを眺ながめたい気分になつた。

(あの方がおっしゃつていた『忘れもの』とは、このことか。……ずいぶんと、豪華な忘れものがあつたものだ)

別に、自分の部屋のクローゼットにも、戦闘服や最新鋭の魔導武器を用意しておいてほしかつた、なんて思つていない。

ただちょっとばかり、ブリュンヒルデの情報収集能力と各種装備を手配できるコネクションの多彩さに、懶りき然ぜんとしただけである。

物思いに耽ふけつていたアレクシアに、ウィルフレッドが声をかけてくる。

「ああ、アレクシアさま。オレの部屋にあつた戦闘服や魔導武器の類たぐいは、クローゼット奥の隠し倉庫に収納されましたよ。あなたの部屋には、そういうものはなかつたのですか?」

「今すぐ確認する!」

——フリルとリボンとレースと貴金属をかき分けて発見した、隠し倉庫。

その中身をウィルフレッドとともにチェックしたアレクシアは、無言になつて俯うつむいた。
「アレクシアさま……」
「……うん。ブリュンヒルデさまへのお礼状は、全身全靈の感謝を込めて書き上げることにするよ」

地位と権力と財力のある大人つて、すごい。

アレクシアはそのとき、心の底からそう思つたのであつた。

それからせわしなく動き回り、ようやく片付けが一段落ついた三人は庭に出た。
改めて「ダラダラしている」と命じられ、セフィードはひどく困惑した様子だ。

(以前は『任意活動時間があつても、何をすればいいのかわからない』と言つていたが……)
これからどうするのだろう、と見守つていると、彼は中庭をあてどなく散策しはじめた。
そうして発見したハンモックを、興味津々の眼差しで見つめている。

アレクシアが使い方を説明してやると、いそいそとハンモックに乗つて、気持ちよさそうに目を閉じた。すぐに、穏おほやかな寝息が聞こえてくる。

初対面のときから思つていたが、つくづく警戒心が欠如けつじょした少年だ。
その無防備な様子を見たアレクシアは、セフィードのさらさらの銀髪に花冠はなかむかを載せてやりたくなつた。

だが、花壇に咲く花を摘もうとしたところで、ウィルフレッドに止められる。

アレクシアは、小首を傾げて彼に問う。

「ダメか？ 似合うし、可愛いと思うんだが……」

「たとえ本人が気にしないだろうとしても、それは止めさせていただきます。いずれセフィードがまつどうな価値観を身につけたとき、全力で地面を掘って埋まりたくなるようなことを見過ごすなど、オレにはできません。ええ、人として」

年頃の少年の価値観というのは、やっぱりいまいちよくわからない。

とはいって、眠るセフィードを花冠で飾ることにさほど執着があつたわけでもない。

ひとまずアレクシアは彼に白いブランケットをかけ、その周囲に羽毛入りの真っ白な丸型クッションを大小取り揃えて添えておくだけにした。

これはこれで、セフィードが雲の上で眠っているように見えるのが、メルヘンチックでいいと思う。

何やらしょっぱい顔をしているウィルフレッドとともに、屋敷の防衛システムを構築し終えたのは、日が暮れる頃のことだ。

こちらへ来るときに買い込んできた非常食料は倉庫にしまつてあるけれど、せつかく拠点を確保

したためでたい日の夕食に、そんな味氣ないものは食べたくない。

さて、どこかへ食べに出るか、それとも何かテイクアウトでもてくるか。

居間でウィルフレッドと相談していたとき、アレクシアの通信魔導具に着信が入った。

確認してみれば、王太子のローレンスからである。

また面倒ごとでなければいいが、と思いながら、ウィルフレッドにも相手の声が聞こえるように設定して通信を繋ぐ。

「アレクシア・スティングラーだ。何かご用かな？ 王太子殿下」

『突然、すまない。——アレクシア嬢。ベネディクトの件、バルツァーご夫妻から伺つた』

低く、静かな声だった。

ベネディクト・ケンブル。アレクシアの腹違いの弟であり、彼女の代わりにスティングラー辺境伯家の次期当主となることが定められた少年。

アレクシアはブリュンヒルデとその再婚相手であるフェルディナントの計らいで、彼と対話する機会を得ることができた。

はじめて会ったベネディクトは、ろくでなしの父親に瓜二つの美貌を持ちながら、非常に聰明で優しい少年だった。

だが彼は、幼い頃より実の母と姉から、陰湿な虐待を受け続けていたという。

アレクシアは小さくため息をつき、ローレンスに問いかける。

「どこまで、聞いたのかね？」

『ご夫妻からは、きみが見聞きしたものすべてを、可能な限り正確に共有したつもりだ、と。陛下やスティングラー辺境伯に報告するかどうかは、僕の判断に任せる、とも言われている』

彼の答えを聞き、アレクシアは思わず苦笑した。

『ベネディクトの主となる覚悟があるのなら、国王陛下やスティングラー辺境伯に頼ることなく、きみ自身の力で彼を救えと？ それはまた、ご夫妻もずいぶんとお節介を焼いたものだ』

『……ああ、そうだね。本当に、ありがたいと思つていてるよ』

どこまでも穏やかで、落ち着いたローレンスの口調。

それを、少し意外に思う。

ローレンスは、とても心優しい少年だ。

周囲の大人たちの思惑ゆえとはいえ、同じ学び舎で親しくしていただろうベネディクトへの虐待を知つて、憤らないはずがない。

けれど、今の彼の声からは、そういう感情の揺らぎを一切感じることができなかつた。

おそらくローレンスは、すでに何かを決意したうえで、こうして連絡をしてきたのだろう。

一呼吸置き、アレクシアは意識を切り替える。

——もしかしたら今の彼は、少し前までの甘やかされたお坊ちやまとは、まるで違う人間になつてゐるのかもしれない。

だとしたら、こちらも真剣に対応しなければ失礼というものだ。

「それで、これからきみはどう動くつもりだ？ ローレンス・アーサー・ランビルディア」

『彼に対する虐待の件を、公にすることは避けたい。本人の名誉のためにもね。けれど、ベネディクトがスティングラー辺境伯家に迎えられることで、彼を虐待した者たちまでその恩恵を受けるのは、どう考えても間違つていると僕は思う』

よほど、考え抜いてきたのだろう。

彼の言葉には、迷いがなかつた。

『段取りは、すべてこちらで手配する。……アレクシア嬢。きみにも何か考えがあつたのかもしれないけれど、今回は僕に譲つてほしい。そのうえできみに協力を願いたい。彼の、姉として』

『姉、ね』

行儀悪くテーブルに肘をつき、アレクシアは問いかける。

『答える前に、ひとつだけ聞かせてもらおうか。殿下。きみは、ベネディクトへの虐待に加担していたというダイアナ嬢については、どう対処するつもりだ？ 彼女も一応、わたしにとつては同じ血を分けた『姉』なのだがな』

『……公明正大で寛容な国王を目指す者ならば、まだ幼く分別を身につけていない彼女に厳しく罪を問うのは間違っている、と答えるのが正しいのかもしれないね』

ローレンスの声に、自嘲が滲む。

『けれど、すまない。アレクシア嬢。僕は、そんな素晴らしい王にはなれそうにない。未来のスティングラー辺境伯たるベネディクトのために、僕は僕にとって無価値なダイアナ嬢を切り捨てる。……軽蔑してくれて構わないよ』

『いや。いい答えだ』

声を和らげ、アレクシアは彼に告げる。

「あくまでもわたし個人にとつては、だがね。きみの言うとおり、わたしはベネディクトを自分の弟だと認識している。きみの目から見ても、ダイアナ嬢が不要で有害な存在でしかないのなら、スッパリと排除してくれたまえ——と、言いたいところではあるのだが」

一度言葉を切り、彼女は続けた。

「わたしが『姉』に喧嘩を売ると、未来の国王であるきみが彼女を切り捨てるのとでは、まるで意味が違つてくる。計画を進める前に、少しだけ時間をくれないだろうか。ベネディクトに、確認しておきたいことがあるんだ」

『なぜだい？　ベネディクトにこの件に関する可否を尋ねることを、僕は優しさだとは思わない。

ダイアナ嬢を切り捨てる決めたのは、この僕だ。彼に、その責任を押しつけるつもりはない』

ウイルフレッドが少し驚いたように目を瞠る。

アレクシアも、驚いた。これが、あの甘つたれのお坊ちゃまだつたローレンスが出した答えなんか。

密かに感動すら覚えながら、彼女は告げた。

「殿下。ベネディクトに何も知らせぬまま、彼の周囲から不穏分子を排除するつもりでいるのなら、きみは本当に優しいな。だが、できることならもう少しだけ、わたしの弟を信じてやってはくれないか？』

『……アレクシア嬢？』

訝しげな声に、彼女は静かに応じる。

『彼は——ベネディクトは、必死にもがいていた。自分の足で、立とうとしていたんだ。今はどれほど無力でも、孤立無援の状況の中、自由を手に入れようと懸命に努力し、足掻いていた。わたしの見た彼は、決して無条件に守られるべき弱者などではなかつたよ』

だから、とアレクシアはローレンスに言う。

『わたしは、ベネディクトに尋ねたいんだ。両親だけではなく、姉のダイアナ嬢とも二度と会うことが叶わなくなつても、本当に後悔しないのか。彼にとって、ダイアナ嬢は王家から切り捨てられ

てしまつても構わない存在なのか」

一度言葉を切り、アレクシアは続けた。

「……いくら客観的に正しいと判断した結果でも、彼自身の気持ちは本人にしかわからない。それが家族間の問題であれば、なおさらだ。わたしは、彼がいつかきみの優しさを知ったときに、一生苦しむようなことになつてほしくない」

ローレンスが答えるまで、少しの間があつた。

『わかつた。きみの判断を尊重する、アレクシア嬢』

「ありがとう。感謝するよ、殿下」

それから細かいことをいくつか確認し、ローレンスとの通話を切る。

振り返れば、いつの間にかひよつこりと居間に現れていたセフィードが、ソファの上でくつろいでいた。アレクシアが彼のそばに置いておいた白い丸型クッションの中でも、一番大きなものを抱えている。可愛い。

ウイルフレッドは、何か言いたげな表情で彼の様子を見ている。

その視線に気づいているのかいないのか、クッションをもにもにと弄びながらセフィードが言う。「アレクシア。これは、気持ちがいいな」

「そうか。それはよかった。気に入ったのなら、おまえにやるぞ。……さて、ちょうど夕飯どきだ

し、どこかへ食べに行くとしよう。ふたりとも、何か食べたいものはあるか?」

栄養バランスがきちんととれた食事と充分な睡眠は、青少年の健全な成長において、最優先で確保されなければならない重要事項だ。

幸い、ウイルフレッドもセフィードも揃つて『肉が食べたい』との返事だったので、街の大衆食堂でそれぞれ好きなだけ肉料理をオーダーすることにした。

もちろん、野菜料理もきちんと食べることが条件である。

アレクシア自身は、完熟トマトのサラダに、新鮮なシーフードがたくさん入ったクリームシチューをいただいたのだが――。

(毎回思うが、こいつらの細い体のいつたいどこに、あれだけの肉が入つていくんだろうな)
しみじみ感心していると、ぶ厚いローストビーフを数回咀嚼(そしゃく)しただけで呑み込んだセフィードが、不思議そうに見つめてきた。

「アレクシア。この国の人間たちは、七力国連合が宣戦布告してきたことを知らないのか?」

ここは小さな店だが、希望すれば個室に案内してもらえるのがありがたいところだ。

多少物騒な話をして、他人に聞きとがめられる不安はない。

「いいや。国王の名において、すでにあらゆる情報媒体を使って周知されているぞ。そのわりに、

街の人々の様子が落ち着いているように見えるのが不思議か？」

「素直に頷くセフィードに、アレクシアは小さく笑う。

「ここは、大陸でも有数の強固な守りを誇る城塞都市だからな。たとえ戦争がはじまるうと自分のちの平穏な生活が脅かされることはない、みな信じ切っているのだろうさ」

「そうなのか。おれのいた研究所では、七力国連合が宣戦布告をすればこの国はすぐに恐慌状態に陥り、短期決戦で片が付くだろうと言われていた。連中は、ずいぶん状況を見誤っていたんだな」

その言葉を聞いたウイルフレッドが、眉をひそめる。

「アレクシアさまの参戦が、彼らにとつて想定外だったのはたしかでしょうが……。それにしても、少々楽観視がすぎる気がしますね」

「ああ、そうだな」

頷き、アレクシアは首を捻る。

「情報戦では、まずは我が国の一勝ということか。我らが国王陛下の情報統制が、よほどしつかりしていたか。あるいは——」

一度言葉を切り、彼女は口元だけで薄く笑つた。

「陛下は、あちらからの宣戦布告を待ち構えているご様子だつたな。七力国連合の飛行魔導兵士部隊が東の国境に現れたときも、この国の飛行魔導兵士部隊をすぐに出せる体制を整えていらした。

もしやスティングラーは、そのための餌にでもされたかな？」

「……それはまた、ずいぶん豪華な餌ですね」

スティングラー辺境伯家は、東の国境守護の要である。

その当主は、今年六十三歳になるデズモンド。

アレクシアの実父である嫡男のエイドリアンは、成人前から放蕩息子として名を馳せていた男で、お世辞にも頼りになる後継者であるとは言いがたい。

一方、南の国境を守護するラクセン辺境伯家の当主は、働き盛りの四十年代。

後継者となる優秀な子どもたちにも恵まれ、東西南北の辺境伯家の中で、最も盤石な体制を築いている。

だからこそ、大陸の南東諸国で構成された七力国連合は、後継者問題で揺れている東のスティングラーブー辺境伯家をまっさきに潰しに来た。

それは裏返せば、スティングラー辺境伯家に隙があると見せれば、勝機を見出した敵が大喜びで食らいついてくるということだ。

——たとえば、エツカルト王国からやつてきたバルツァー夫妻に挨拶するため、スティングラーブー辺境伯が自ら王都へ赴くとなれば、必然的に領地の守りは万全ではなくなるだろう。

国王はそれを見越したうえで、七力国連合からの宣戦布告を誘つたのかもしれない。

たとえどんな大義名分を掲げようと、戦などいうものは先に手を出したほうが、いずれ必ず世間から誹られるものなのだ。

アレクシアは、ひょいと肩をすくめる。

「まあ、済んだことはいいさ。スティングラーには王家から充分な見舞金が支払われただろうし、今さらガタガタ言つたところではじまらん。まずは、目の前のことからひとつずつ片付けていくしかあるまいよ」

「はい。まずは、ベネディクトさまとの面会ですね」

そのとおりだ、とアレクシアはウィルフレッドとセフィードを順に見た。

「王太子殿下が、面会の場として彼の離宮を提供してくださるそうだから、わたしは現地まで『病弱で繊細な令嬢モード』で赴くことになる。ウィルはいつもどおりわたしの従者としてついてもらうが、セフィードはどうしたものかな」

きよどんとまばたきをしたセフィードが、淡々と口を開く。

「待機命令を出されれば、おれはある屋敷で待機しているぞ」

「おまえがわたしたちのいない状況でも、きちんと三度の食事をとれるというのなら、ひとりで留守番でもなんでもさせておけるんだがな……」

彼は、非常に賢い子どもである。ひとつひとつ丁寧に教えてやれば、こうして外食をすることも、

あるいは屋敷の厨房で自炊することだって、すぐにひとりでできるようになるかも知れない。

しかし、たつた数日の付き合いではあるが、わかつたことがある。

アレクシアは、じつとりとセフィードを睨みつけた。

「おまえは、わたしたちが命じるか許可を出さなければ、食事をしようとはしないじゃないか」

「……食事というのは、許可がなくても実行していいものなのか？」

困惑したように首を傾げるセフィードに、アレクシアは深々とため息をつく。

やはりこの少年は、自分の肉体から出される空腹のシグナルに対して、あまりに無頓着だ。

食事だけの問題ではない。何か不測の事態が起こったとき、彼が『自身の安全』を最優先に考えられるものかどうか、はなはだ不安だ。

「こういうことは、日常生活の中で徐々に理解していくべきだろうし、あまり命令で縛りたくはないんだ。——ウィル、おまえはどうしたらいいと思う？」

悩む彼女に、ウィルフレッドが笑い交じりの声で応じる。

「ならば、セフィードも従者見習いとして同伴させればいいのではありませんか？ 何しろあなたは『病弱で繊細な深窓の令嬢』なんです。今は戦時下なのですし、従者を複数伴つても誰も不思議には思いませんよ」

「……殿下にとつてこいつは、敵軍から捕らえたばかりの、戦闘能力保証付きの生物兵器のような

ものだと思うんだが。そんなものを連れていくつて、彼の胃は大丈夫だと思うか？」

ローレンスはどうやら胃痛持ちのようなので、他人事ながら少し心配なのだ。

しかし、ウイルフレッドは軽やかに笑つて言つた。

「それを言うなら、オレたちだつて似たようなものではありませんか。王家に忠誠を誓つているわけでもない、戦闘能力ばかりに秀でた世間知らずの子どもたち。殿下は、そんなものを制御して利用しようというのです。彼の胃が少々痛むことなど、些細な問題にすぎませんよ」

「なるほど。そもそもうだ」

実際のところ、今のアレクシアはウイルフレッドとセフィード、それにベネディクトのことを気にかけるだけで精一杯なのだ。

王太子であるローレンスは常に大勢の味方に囲まれているのだし、必要以上にこちらが彼の胃を案じる必要もないだろう。

鶏肉のスパイス揚げを頬張つていたセフィードが、ウイルフレッドを見る。

「アレクシアの従者見習いか。だつたらおれは、おまえの後ろに黙つてついていればいいのか？」

「ああ、そうだ。いい機会だから、貴族社会の人間やそれに付き従う者たちがどのよう振る舞いをするのか、実際に見て学習するといい。多少のミスならこちらでフォローするが、アレクシアさまの恥になるような真似だけはするなよ」

「了解した」

何やら、実にほほえましい光景である。

考えてみれば、ウイルフレッドにとつてセフィードははじめての後輩だ。

それがこれほど素直で愛くるしい少年となれば、さぞ指導のし甲斐があることだろう。

そんなふたりの様子を機嫌よく眺めながら、アレクシアは食後のデザートを注文した。

運ばれてきたチョコレートとレアチーズのタルトは、大変絶品だった。

同じものを注文したセフィードも、よほどそれを気に入つたらしい。

四度おかわりをして、ようやく満足したらしい彼を見たアレクシアは、テーブルの上でぐつと両手を握りしめる。

「これだけボリュームのあるタルトを五ピース食べて、まったく胃もたれする様子がない、だと……？」

「……オレは、見ているだけで胸焼けがしてきました」

ウイルフレッドの顔色が、少し悪い。

とりあえず、セフィードが甘いもの好きであることは、どうやら間違いないようだ。

今はまだ、彼の精神状態を安定させるためのダラダラ期間だから、特に制限をかけるつもりは

ない。

けれど、いざれは**にゅうしょうぶん**乳脂肪分たっぷりの甘味とカロリーの関係について、じっくりレクチャーする必要がある。

(世話をしている子どもを**ひまわり**肥満体にするのは、立派な虐待だからな。……気をつけなければ)

セフイードを拾つて保護すると決めたのは、アレクシアなのだ。

これから彼がどんな大人になるにせよ、成人病まっしぐらなぼよつた体にだけは絶対にするまい、とアレクシアは固く心に誓うのだつた。



ローレンスがベネディクトとの面会のために指定してきたのは、聖コルトベルガーラ学園からほど近い場所にある離宮だつた。

優美なレリーフを施された鉄柵に、クリーム色とオレンジの夏薔薇が絡まり、今を盛りとばかりに咲き誇つている。

白とレモンイエローを基調としたサマードレスをまとい、つばの広い帽子とシルクの手袋で完全武装——もとい、王族を訪問する際の盛装をしたアレクシアは、招き入れられた中庭の見事さに感

嘆していた。

(さすがは、王太子が使用している離宮だな。防衛システムのえげつなさは、王宮中心部レベルと見た)

完璧なまでに整えられた美しい庭園。

そのすべてをフォローしている防衛システムは、すべての術式が見事に調和していて、攻略する気にもなれないレベルだ。

防御魔導フィールドなど、何重にかかっているのかさえはつきりと確認できない。**にんしきそがい**認識阻害の魔術が、ありとあらゆるポイントで組みこまれているようだ。実に興味深い。

そんなことを考えながら、アレクシアは従者の格好をしたウイルフレッドとセフイードを伴い、従僕に先導されるまま、中庭のさらに奥へ進んでいく。

ちよつとした迷路のように入り組んだ生け垣をいくつか抜ける。ぱつかりと開けた芝生の向こうに、愛らしい花々で飾られた四阿があつた。

猫足の円形ガーデンテーブルの上には、白磁の茶器といかにも美味しそうな軽食が揃えられている。

そして——。

「ようこそ、アレクシア嬢。来てくて嬉しいよ。今日はエツカルト産の紅茶を用意してあるから、

「ぜひ楽しんでいつてくれ」

「こちらこそ、この場を用意してくれたこと、感謝する。王太子殿下。ブリュンヒルデさまの祖国のお茶か。ありがとう、のちほど楽しませてもらうよ」

立ち上がって一同を出迎えたローレンスの護衛たちは、みな以前シンフィールド学園で見た顔だ。これならば、令嬢モードでいる必要はない。

アレクシアは、ありがたく通常モードに切り替えた。

さつそく、彼の斜め後ろに控えていたベネディクトに、にこりと笑いかける。

「やあ、ベネディクト——と、呼んでもいいのかな？」

「……アレクシアさん」

硬い表情で名を呼ぶ彼に、アレクシアは肩をすくめた。

「やはり、わたしに馴れ馴れしくされるのは不快だつたかね」

「いつ、いえ！ 不快だとか、そんなことはまったくありません！ ただ、その……あなたには、迷惑をかけてばかり、なので」

俯いたベネディクトが、掠れた声で言う。

「ぼくに……弟と扱つていただく資格など、ないと思います」

「ふむ？ よくわからんが、きみが不快ではないのならば、ベネディクトという呼称はこのまま採用

用させてもらおう。何、呼び方など大した問題ではないさ。すぐに慣れるだろうから、細かいことは気にするな」

一拍置いて、ベネディクトがぎくしゃくとローレンスを見る。この国の王太子は、至極真顔で頷いた。

「気持ちはわかる、ベネディクト。だが、アレクシア嬢は紛れもなくきみの姉君だ。彼女がきみを弟として扱うことには、なんの問題もないと思うよ」

「……そう、なのでしようか」

何やら欣然としていない様子だが、今日はベネディクトを呼び捨てにするために来たわけではない。

アレクシアは、一度周囲を見回してから、ローレンスに視線を向いた。

「殿下。今日この場で話すことは、一切外部に漏れない^もと考えていいのかね？」

「もちろんだよ、アレクシア嬢」

なんのためらいもなく応じたローレンスが片手を上げると、護衛たちが一礼したのち下がつていいく。

さすがに姿が見えなくなるほどの距離までは離れていかないものの、そこは仕方があるまい。どうせ、これから会話を聞かれるのだろう。

そもそも極秘にしなければならないようなことでもないし、護衛の存在に慣れていないベネディクトに対するプレッシャーが減れば充分だ。

そのベネディクトが、困惑した表情を浮かべている。

アレクシアは、苦笑した。

「ベネディクト。きみは今日の面会にあたって、殿下から何か聞いているか？」

「え？　あ……はい。先日の件については、バルツァーご夫妻から殿下にご連絡があつたことと、そのうえで改めてあなたとお会いする場を設けてくださつたことで——あああの、その節は、本当にありがとうございました！」

突然、ベネディクトが勢いよく頭を下げる。

「すみません……！　あなたにお会いできたら、どんなふうにお詫びしようかと、ずっと考えていたのですけれど。もう、本当に、思い出すだけでも情けなくて、恥ずかしくて……。初対面の女の子の前であんな醜態を晒すだなんて、ぼくはいつたい何をしてかしているんだと……」

しどろもどろに言う彼に、アレクシアはできるだけ柔らかな口調で応じた。

「謝罪は受け取る。だから、もう謝らないでくれ。わたしはきみに会えて嬉しかつた。今も、嬉しい。……本当だよ、ベネディクト。わたしは、きみがわたしの弟で、とても嬉しいんだ」

嬉しい、というよりも、感動している、というほうが正しいかも知れない。

ベネディクトはたしかにエイドリアンとそつくり同じ顔をしているというのに、その口から出てくる言葉は素直で自省に満ちたものばかりだ。

何度見ても、そのギャップにはしみじみと胸が震えてしまう。

（これはもう、世界の七不思議のひとつにカウントしてもいいのではなかろうか。血の繋がりの妙とは、実に不思議なものだな）

ウィルフレッドに聞かれたら、半目で「鏡をお持ちしましょか？」と言われそうなことを考えながら、アレクシアはベネディクトに近づいた。

そして、彼の目の前でストンとしゃがむ。

頭を下げたままひどく驚いた顔をしている『弟』を見上げ、にやりと笑う。

「顔を上げたまえ、ベネディクト。きみがどう思つていようと、わたしにとつてきみはすでに弟なんだ。魔力暴走のフォローくらい、いくらでもしてやるさ」

「……あなたがぼくの姉だから、ですか？」

その問いかけには、首を傾げる。

「さてな。たとえ血の繋がった相手でも、わたしは気に入らない人間に無駄な時間を割くほど暇ではない。わたしにとつて血の繋がりというのは、さほど重要なファクターではないんだ」

「え……」

少し考え、アレクシアは立ち上がった。

困惑した様子のベネディクトも、それにつられたように姿勢を戻す。

「手を出してもらえるか？」

「……はい」

おずおずと出された両手を握り、はじめて会ったときと同じように柔らかく指を絡める。

伝わる体温と、魔力の波長。

「やはり、きみとわたしの魔力はよく似ているな。……これが血の繋がりゆえだというなら、たしかにそのとおりではあるのだろう」

だが、とアレクシアは笑つて告げた。

「きみの髪や瞳や魔力がどれほど自分に似ていても、その性根しようねがエイドリアンさまのような腐くさりきつたものであつたなら、こうして触ふれ合うことなど絶対になかつたぞ」

ベネディクトの目が、丸くなる。

そんな彼の心に届くよう、できるだけゆつくりとした口調で、彼女は続けた。

「わたしは、劣悪れつきくな環境で育てられながら、周囲の誰も傷つけることなく、決してあきらめずに足搔き続けたきみの生き様を、見事だと思う」

ベネディクトほどの魔力があれば——まして今より幼い子どもであつたのなら、ちょっとした瘤かぶ

しづくがすさまじい被害ひがいをもたらす魔力暴走に繋がつたはずだ。

ろくな食事も与えられず、暗い部屋に閉じ込められる日々の中、彼はひたすら自分の力を押さえ込み、周囲の者たちを自分自身から守り続けた。

ベネディクトにとつて、『他者を害すること』はそれほどの禁忌きんぎなのだ。

たとえそれが、『己おのれ』を虐待する者たちであつたとしても。

彼を「愚おろかだ」と、「自分自身を守ることに、何をためらう必要がある」と言う者もいるかもしれない。

けれど、ベネディクトのそんな愚かなまでの優しさは、紛れもなく彼自身の強さだとアレクシアは思う。

だから、と彼女は敬愛すべき『弟』に告げる。

「胸を張れ、ベネディクト。きみの強さと優しさは、スティングラーの血とは関係がない。暗闇くらやみの中、きみ自身が選んで自分の力としたものだ。その選択を、誇りに思え」

「……つ」

繋いだ指が震え、アレクシアと同じ色の瞳から透明な涙とうめいが溢あふれ出す。

よく泣く少年だな、と思うけれど、ストレス解消に涙を流すのは非常に有効な手段である。ここは、気の済むまで泣かせてやるのが正解だろう。

「なあ、ベネディクト。先日、わたしが最後にきみに言つたことを、覚えてるか？」

ベネディクトの濡れた睫毛が、ふるりと揺れる。

「あのときまで、きみはずつとひとりで戦つていた。だが、今は違う」

——次にわたしと会うには、きっと、きみの世界は変わつているよ。

「フェルディナントさまもおつしやつていただろう。きみはもう、ひとりじゃない。きみが戦うときは、わたしも一緒に戦おう。わたしは、きみと『いう弟がいることを誇りに思うよ』

「……アレクシア、さん」

絡んでいた指先が離れ、そのまま縋るよう抱きしめられた。ベネディクトの震える背中に腕を回し、とんとんと叩いてやる。

「ぼく、は……」

涙交じりの声で、ベネディクトが言う。

「あなたの弟に、なりたい。ちゃんと……弟として、あなたの前で胸を張れるようになりたい、です」

「そうか。それは、嬉しいな」

どうやら彼は、アレクシアのことを姉と認めてくれたらしい。

それは、実にありがたいのだが——。

(なん……つだ、この体の薄さは!? あああああ、今すぐベネディクトの口に栄養たっぷりの食事を詰め込みたい！ 適度な運動と充分な睡眠時間を確保して、このひょろひょろの不健康すぎる体をせめて標準体型にしてやりたいっ!!)
服の上から見てているだけでも、細い細いと思っていたベネディクトの体は、実際に触れてみると想像以上の頼りなさだった。

正直、怖い。

筋肉が少ないせいか基礎体温も低いようだし、ちょっとした病気や怪我で簡単に天に召されてしまいそうだ。

アレクシアが密かに戦慄していると、大きく息を吐いたベネディクトが腕の力を緩めていく。
彼は袖口で目元を拭い、ぎこちなく、けれど柔らかな表情でほほえんだ。

「僕は、あなたの前で泣いてばかりですね」

「そうだな。だがまあ、少しはスッキリしたようで何よりだ」

頷き、アレクシアはそばで待機していた連れの少年たちを振り返る。

そして、一人の様子を見て眉根を寄せた。

「……おまえたち、何をしているんだ？」

彼女の問いかけに、顔を上げたウィルフレッドが、にこりとほほえむ。

「セフィードが、この庭園に展開された防衛システムに興味を抱いてしまいました。解析したそばから魔術式を延々と口に出していくのですから、物理的に発言を封じております」

「……ほほう」

地面に膝をついたウィルフレッドは、セフィードの両腕を後ろ手にする形で拘束していた。

強制的に座らされ、口元を片手で塞ふさがれてもなお、まばたきもせずにじっと中空を眺めているセフィードの姿は、かなり不気味だ。

そんな彼を青ざめた顔で見つめるローレンスも、どん引きした様子である。

ひとつため息をついたアレクシアは、手袋を外してセフィードの目の前に立つた。

その鼻先で思い切り手を打ち合わせる。

——沈黙。

「うむ。やはり、無反応か」

「感心している場合ではありませんよ、アレクシアさま。このままでは、ここ Defense System を解析し終えたセフィードが現実に戻つてくるまで、オレの両手が使えません」

ウィルフレッドの主張に続いて、ローレンスがすちやつと片手を擧げる。

「アレクシア嬢。いくらみの庇護下にある少年だといっても、部外者にここ Defense System を丸裸にされるのは困るよ。僕の護衛たちがこちらへ来てしまう前に、どうにかしてくれ」

「そう言われてもなあ。わたしどしても、どうにかしたいのはやまやまなのだが……」
こんなふうに目の前の作業に没頭してしまった魔導士を、本人が満足する前に引き戻すのは、非常に困難だ。

たとえば何か、命の危機を感じるほどのことでもなければ——と思つたとき、セフィードの頭に、

可愛らしい菓子店のロゴが入つた紙袋がぽすつとかぶせられた。

突然視界を遮られたセフィードが、一拍置いてもそもそもと体を揺らす。

……どうやら、前触れなく視界を遮断されたことに驚いて、トランク状態から脱したらしい。

ものすごく複雑な表情をしたウィルフレッドが手を離しても、そのままおとなしくしている。

彼に紙袋をかぶせたベネディクトは、ほつとした様子でほほえんだ。

「よかつた。落ち着かれたようですね」

「ベネディクト。なぜ、その紙袋を……？」

アレクシアの問いかけに、ベネディクトはガーデンテーブルを手のひらで示して応じる。

「はい。先日の件でご迷惑をかけたお詫びに、街で評判のお菓子をご用意してきました。よかつたら、のちほどみなさんで召し上がるってください」

そこには、可愛らしくラッピングされた色とりどりのキャンディーボックスが、丁寧に並べて置かれていた。

果物の果汁を丁寧に煮詰めて作つたというそれらは、アレクシアも一度味わつてみたいと思つていたものだ。気遣い上手な弟で、とても嬉しい。

もつとも、彼女が知りたかったのはここに紙袋がある理由ではなく、ベネディクトがセフィードに紙袋をかぶせた理由だつたのだが――。

「こここの空一面に、すごい勢いで変化しながら流れていく光の文字や数字が、庭園の防衛システムの魔術式なんですね。あんなのを見ていたら、目が疲れてしましますよ。紙袋で目隠しができて、よかったです」

「……うむ。そのとおりだな」

さらりと告げられたのは、至極もつともな正論であつた。

何はともあれ、ベネディクトのおかげでセフィードを正気に戻せたのだから、感謝せねばなるまい。

それにしても、とアレクシアは思う。

（あの超高速で変化・更新し続ける魔術式を、一目でそれと識別できるのか。一般兵レベルの魔導士ならば、うつすらと光の帯が流れている程度にしかわからないと思うんだが……。ベネディクトの魔導認識能力は想像以上に精度が高いのかもしれない）

幼い頃からまつとうな教育を受けさせていれば、ベネディクトはさぞハイレベルな魔導士になつ

ていたに違ひない。

ケンブル男爵家も、つくづく愚かな真似をしたものだ。

それから、セフィードが「紙袋をかぶつていたままのほうが、魔術式が気にならなくていい」と主張するのに対し、ウィルフレッドが「おまえは、アレクシアさまに恥をかかせるつもりか?」と笑顔で威圧するという一幕があつたものの、どうにかその場は落ち着いた。

「わかつた。じゃあ、アレクシアたちの話が済むまで目をつむつていてる」

「セフィード！ 立つたまま寝ようとするな！」

……ウィルフレッドとセフィードがすつかり仲よくなつたようで、何よりである。

氣を取り直したローレンスがガーデンテーブルに誘つてきたので、アレクシアはベネディクトとともにそれに応じた。

エツカルト王国の紋章と、美麗な文字と絵が描かれているお茶の缶を取り、ローレンスに問う。

「エツカルト王国産だという紅茶は、これかね？」

「ああ、そうだよ……って、あー……。うん。そうか。そういうえばきみは、紅茶を淹れるのだつてお手の物なレディでもあつたんだよね……」

慣れた手つきで保温効果のある魔導ポットを用意したアレクシアに、ローレンスが半笑いでそん

なことを言つてきた。

「なんだ、殿下。物忘れがはじまるにはまだ早いぞ。……ああ、それともレディらしい振る舞いをするときには、話し方もそれに応じて変えたほうがよかつたかね？」

「いや、結構だ」

ものすごく真顔かつ即答で拒否されてしまつた。

だが、今後のことを考えれば、ベネディクトにも彼女の令嬢モードを確認させておいたほうがいいだろう。

アレクシアは一呼吸ののち、につこりと優雅にほほえんだ。

「どうぞご安心くださいませ、王太子殿下。ご要望とあれば、いつでも『病弱で繊細な貴族令嬢』としてお話しさせていただきますわ」

「……うん。何度見ても、ひょっとして二重人格じゃないのかと疑いたくなるレベルの、ものすごく立派な猫かぶりだよねえ」

お褒めにあずかり、光栄である。

アレクシアは、令嬢モードのままベネディクトに視線を向けた。

「ねえ、ベネディクト。あなたの紅茶には、ミルクかレモンは添えたほうがよろしいかしら？」

「あ……はい。ええと、あの……ミルクを、お願いします」

しどろもどろに応じる彼は、アレクシアのモード変更についてこられていないようだ。
ほほえみを消さないまま彼女は言う。

「ほかの者の目があるところでお会いするときは、わたくしは基本的にこういった立ち居振る舞いになります。どうぞベネディクトも、今のうちに慣れておいてくださいね」

「そ……そうなんですね。わかりました」

何やらひどく腰こしが引けた様子の彼に、アレクシアは軽く眉根を寄せた。

「すまない、ベネディクト。ひょっとして、こういった貴族階級の女性らしい振る舞いは、きみにいやな記憶を思い出させるものだったかな？」

「え？……あ、いえ！　ただ単に、先ほどまでのご様子との違いに、ちょっとびっくりしただけです！　どうぞ、お気遣いなく！」

勢い込んだベネディクトの答えに、ローレンスがうんうんと頷いている。
気持ちちはわかる、とでも言いたげだ。

「そうか？　だつたら、いいのだが……」

「はい。こちらこそ、失礼いたしました」

申し訳なさそうに詫びる姿から、怯えは感じられない。

とはい、アレクシアの令嬢モードに慣れもらうのは、そう急ぐ必要もないことだ。今の時点

で、わざわざベネディクトに混乱を与えてストレスを増やすこともいいだろう。

アレクシアは優雅な手つきでポットを持つと、ちょうどよく色と香りの出た紅茶を白磁のカップに注ぎ、少年たちの前に置いた。

「まあ、いい。今日のところは、普段の口調で通させてもらおう。——それで？ 殿下。ここから先については、わたしのほうからベネディクトに伝えていいのかね？」

「いや。僕から話させてもらうよ」

紅茶を一口飲んで姿勢を正したローレンスが、真剣な眼差しでベネディクトを見た。

「まず、これだけは伝えておく。きみの姉君……アレクシア嬢は、ランヒルド王家に忠誠を誓つて

いない。そのことは、国王陛下もご存じだ」

「……はい？」

ベネディクトが一瞬、何を言われたのかわからない、という顔をした。

そんな彼に、あくまでも真顔でローレンスが告げる。

「かつて彼女が捧げてくれていた忠誠を、僕ら王家は土足で踏みにじった。今の僕らが彼女と交わせるのは、互いの信頼に基づく忠義と庇護の主従関係ではなく、利害の一致から成り立つ取引のみだ。そのうえで、きみに聞きたい」

一呼吸置いて、彼は問う。



「ベネディクト。きみは、アレクシア嬢を傷つけた王家を、許せるか？」

（……は？）

なんだその頓珍漢な質問は、と思つたけれど、ローレンスとベネディクトがやたらと真剣な面持ちなので、アレクシアは眉をひそめるだけで沈黙を守つた。

ベネディクトが少しの間のあと、感情の透けない声で口を開く。

「殿下。アレクシアさんがこうして同じテーブルについているということは、彼女は少なくともあなた個人を忌避してはいないでしよう」

ですが、とベネディクトが静かに続ける。

「ぼく自身が見聞きしてきた事実と、それを補完してくださったバルツァーご夫妻の言葉から判断して、この国の王家は——当代国王陛下は、一度は不要だと切り捨てたアレクシアさんを、再び都合のいい駒として使うつもりなのだと認識しています」

その言葉に、ローレンスは静かに頷いた。

「そうだね。きみの認識は正しい。否定するつもりはないよ」

「はい。アレクシアさんがぼくを弟と呼んでくださる限り、ぼくは彼女の弟として恥じることのない人間でありたい。ぼくは、国王陛下が正式にアレクシアさんへ謝罪されないのなら、彼女を傷つけた陛下を許すつもりはありません」

淡々と言葉を紡いだベネディクトが、アレクシアを見て少し困ったような表情を浮かべる。

「出過ぎた真似を、と思われたなら、申し訳ないです。アレクシアさん」

「……いや。きみの気持ちは嬉しく思う、ベネディクト。だが、あの古狸国王ふるだぬきがわたしに詫びる可能性は、間違いなくゼロだぞ」

国王というのは、そう軽々しく頭を下げていい立場ではない。相手が未成年の少女であれば、なおさらだ。

首を捻ひねった彼女の言葉に、ベネディクトが再びローレンスに視線を向けた。

小さく息を吐いたこの国の王太子は、その視線をまっすぐに受け止める。

「きみの気持ちは、了解した。——ベネディクト。アレクシア嬢。王家の一員として、きみたちには心から申し訳なく思つてゐる。本当に、すまない」

テーブルに置かれた彼の指先に、ぐつと力が籠もつた。

「陛下に對してまだ何も意見する力がない僕の謝罪に、価値などないことはわかっている。それで

も、僕は……きみたちには、誠実でありたい」

悔しげにそう言うローレンスに、アレクシアは柔らかくほほえんだ。

「殿下。わたしは、きみが誠実な人間であることを知つてゐるよ」

国王と同じゴールドアンバーの瞳が、彼女を映す。

「言つただろう。わたしは、きみを信じると。きみは、きみが正しいと信じたことをすればいい」

「アレクシア嬢……」

少し掠れた声で呼ぶローレンスに頷き、アレクシアはベネディクトに声をかけた。

「たしかにこの国の国王は非常にいけすかない御仁だが、殿下は見てのとおりとても素直な少年だ。もちろん、これはあくまでもわたし個人の評価だから、今後きみが彼とどう付き合っていくかは、きみ自身で判断するといい」

「……そう、ですね」

一度目を伏せたベネディクトが、そつと息を吐いてから顔を上げる。

「申し訳ありません、殿下。ご存じのとおり、ぼくは大変世間知らずな子どもなので、王家への忠誠と言われても、正直よく理解できんです」

「そ、ですか」

貴族階級の少年にあるまじき言葉に、ローレンスは虚^{きよ}を突かれたようだつた。

アレクシアも少々驚いたが、ベネディクトの言い分はもつともだ。

何しろ彼は、まつとうな貴族教育どころか、こうして普通に他人と会話をしているのが不思議なほど、悲惨な幼年期を過ごしているのである。

貴族の子どもたちが生まれた瞬間から教え込まれる『王家への忠誠心』など、ベネディクトに

とつては絶^{ぜつ}空^{そら}事^{こと}でしかないのかもしれない。

「ただ、貴族が王家に忠誠を誓い、それに報^{ほう}いる形で王家が貴族たちを、ひいてはそれぞれの領地で暮らす民を庇護^{ひご}している、という仕組みになつてているのは存じています」

そう言い、ベネディクトはローレンスに問う。

「現状、ぼくはスティングラー辺境伯家の後継者と見なされているわけですが……。殿下。ぼくからも、聞かせていただきたい。あなたは、ご自分に——王家に忠誠を誓っていない相手でも、臣下としてお認めになるのですか?」

「……臣下、か」

両手の指を軽く組み、ローレンスが苦笑を浮かべる。

「きみの言うとおり、この国の社会システムは、王家という強大な力を持つリーダーに対し、貴族たちが絶対的に服従することで秩序を保つてゐる。人間が社会という群れを作つて生きる存在である以上、統制するリーダーが揺るぎなく立ち続けることは、群れの存続にとつて必須条件だ」

だからこそ、と彼は静かに続けた。

「リーダーである王家に牙を剥ぐ者は、群れの秩序を乱^{みだ}す者として排除される。ならば、群れの上位存在である辺境伯家が王家に忠誠を誓つていないなど、断じて許されることではない。……この国の王太子である僕は、そう答えるべきなのだろうね」

「殿下……？」

戸惑つたようにベネディクトが呼びかけた。

いずれこの国を王として統^すべる少年は、ひどく複雑な表情を浮かべて応じる。

「陛下ならば、迷わずそう言うだろうと思うんだ。の方は、強いから。僕は今まで、の方の搖

るぎない背中しか見たことがない。けれど、僕は——あの方のすべてを肯定することなんて、もう

「きない」
迷いと、
葛藤^{かつとう}。

人の上に立つ者が、決して他者に見せてはいけない顔を晒したローレンスを見て、少しの間ペネディクトは沈黙していた。

やがて、何か聞いた顔をして、ぽんと両手を打ち合わせる。「なるほど。役下は見正、^{おほて}てこそこは又九月申まつごすよ」

「…………えええー」

身も蓋もないベネディクトの言いよう

さすがにちよこと 久の轟はなづてきた
それでも、このところずいぶん打たれ強くなつたらしい彼は、さほど時間がかけず顔を上げる。

アレクシアは感動した。

(立派になつたなあ、殿下)
胸の内で、「うしづめ、うしづめ——こ心愛——て——る——、シネ「イク、ガシ——」ヒコ我が——そ娘子ヒコ女又ヒコ娘

脇の内で「かんばれ」と応援していると振り返る。

「ぼくは何か、おかしなことを言つたでしようか?」
「いや。こども、殿下は青い春真っ盛りの十七歳だ。その手で『又九郎』と言つてゐるのは、少々氣

「いいかが廻り青着裏、盛りの十肩力半の金恥ずかしかつたのではないかな」

「アノクシア裏！」鳶^{ハト}「こ儘^{カネ}を金^{カネ}入^{スル}ひのはやめてくれな、」
そう応じたアレクシアに、ローレンスがぎやあとと喚いた。

「む？ わたしとしては、フォローをしたつもりだつたのだが……」

「覚えておくといい、アレクシア嬢。お年頃の少年とはいっても、本当のことなどをズバッと指摘される

どものすごくいたたまれない気持ちになるし、ときには心が折れることさえあるんだ。きみの大事な従者や保護監督中の少年だつて、僕と同じ年頃なのだから、少し発言に気をつけたほうがいいと思うよ」

アレクシアは、無言で自分の従者たちを振り返った。

立ち読みサンプル
はここまで

らして、ローレンスの言葉に思い当たる節があるようだ。
ひとつ頷き、アレクシアはローレンスに視線を戻す。

「なるほど。忠告、感謝する」

「うん。——それから、ベネディクト。きみは、間違いなくアレクシア嬢の弟だ。自信を持つてそういう名乗るといいよ」

真顔で言って、ローレンスはベネディクトと向き直った。

「きみの質問にまだ答えていなかつたね。……僕は、今のきみが王家に対する忠誠心を持つていなのは、当然だと思う。そして、今後きみが正式にスティングラー辺境伯家を継いだとき、その忠誠を得るために努力するのは、いずれこの国の王となる僕の義務だ」

「僕は、きみが僕の臣下として生きてくれるというなら、喜んで受け入れる。今後の僕らの関係に

おいて大切なのは、きみが僕を王として認めるか否かだ」

驚いたようにまばたきをするベネディクトに、ローレンスは静かな声で告げた。

「選ぶのはきみだ。どんなふうに生きるのか、誰を主として選ぶのか。もちろん、今すぐでなくていい。ただ、その決断のときに、ほかの誰かの意思に流されるのだけはやめてほしいんだ。必ず、きみ自身の頭と心で決めてくれ」

その言葉を受け止めたベネディクトが、沈思するように目を伏せた。

アレクシアはそんなふたりの様子を見守りながら、しみじみと不思議に思う。

(ベネディクトといい、殿下といい、ろくでなしの父親を持つとは信じがたいほど、素直で誠実な少年たちだな。……もしかしたら、似た者同士で気が合うのではないか)

主君だの臣下だと難しいことを語っているけれど、ふたりともまだ十代の少年なのだ。

もう少し肩の力を抜けばいいものを、と考えていると、ベネディクトが意を決したように口を開く。

「やはり、今のぼくでは——世の中を何も知らないままのぼくでは、誰かに忠誠を誓うことの意味を理解できません。お言葉に甘えて、この件については保留させていただきたいと思います」
彼なりに熟考したに違いない答えに、ローレンスはほつとしたようだ。

「ああ。待っているよ」

「ありがとうございます」

張り詰めた空気が緩んだのを見て、アレクシアはローレンスに声をかける。

「殿下。きみの決意に感謝する。きみがベネディクトに誠実であるうとしていること、心から嬉しく思うよ。——ありがとうございます」

「……こちらこそ、だよ。アレクシア嬢。きみが僕の味方でいてくれて、本当に心強く思つて